

資 料

周手術期看護実習の展開の工夫と
学生の学びの効果に関する文献レビュー

佐久間和幸 佐佐木智絵 井上菜穂美
淑徳大学看護栄養学部

A review of literature on the development of perioperative nursing practical training and its effects on student learning

Kazuyuki Sakuma, Tomoe Sasaki, Naomi Inoue
School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

要旨

【目的】成人看護学における周手術期看護実習の文献を検討し、周手術期看護実習の展開方法と学生の学びとの関連について明らかにすることである。

【方法】データベースとして医中誌Webを用いて過去5年間の原著論文を対象に、“周手術期 and 実習 not 会議録”をキーワードとして文献を検索した。該当した46文献のうち19文献を用いてマトリックス方式を用いて文献レビューを行った。

【結果】文献レビューの結果、周手術期の患者を受け持った看護過程の展開を含む周手術期看護実習の展開方法と学生の学びは、『手術室・ICU実習（病棟外）の効果』、『実習の効果』、『記録用紙の効果』、『実習前の講義・演習との連携の効果』、『指導方法の工夫による効果』の5つに分類された。

【結論】手術室・ICUは特殊な環境であることから、周手術期看護実習の効果的な展開方法として、実習記録の整備、臨地指導者との連携強化、実習前のイメージづくり、観察ポイントの提示、ロールプレイを用いた実習後の振り返りの必要性が示唆された。

キーワード：周手術期、臨地実習、学習効果

Key Words: perioperative period, clinical training, learning effect

I. はじめに

文部科学省（2002）によると、看護学における臨地実習は「看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学習過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する」とされている。このように、臨地実習は学生の既習知を最大限に生かして患者に必要なケアを実践する学習であり、学生にとっては「知る」から「わかる」へと移行するための重要な教授方法といえる。

周手術期看護実習は、術前・術中・術後と経過を辿る患者を理解することで、回復期支援の看護の役割を理解することが重要である。周手術期看護をとりまく状況として、近年、低侵襲手術や麻酔技術の進歩・向上により、手術後の早期退院が可能になっていることから、福本ら（2014）は「患者の在院日数の短縮などにより、患者情報から看護展開を行い、看護援助に結び付ける一連の流れに困難さがみられる」と述べている。また、周手術期看護実習に関する先行研究では、学生のストレスの高さについても指摘されている（菊池ら、2018；服部ら、2016）。学生は病院という緊張を

伴う環境の中に身を置き、特に周手術期看護を学ぶうえで、特殊性の高い手術室や集中治療室（ICU：Intensive Care Unit、以下ICUとする）、冠疾患治療室（CCU：Cardiac Care Unit、以下CCUとする）などの環境で周手術期看護を実践し、学びを得ている。学生にとっては初めての経験が多く、一般病棟とは異なる環境において様々な思いを抱えながらも、患者の思いに耳を傾け学んでいる現状である。

このような状況の中、本学では周手術期看護実習として2週間を1クールとして、全身麻酔による手術を受ける患者を受け持ち、看護過程を展開する実習を行っている。受け持ち患者の手術見学のみならず、術式や術後経過によってはICUにおいても見学実習を行い、看護過程を展開している。学生は、患者に生じる周手術期ならではの急激な心身の状態の変化に対応しつつ、2週間の間に病棟や手術室、ICUなどの異なる環境を移動したり、受け持ち患者の術式や経過によっては短期間に複数の患者を受け持ちたりしている。その結果、自分が行った看護実践の振り返りや意味づけを深く行えないまま実習を終了することも多い。そのため、今後のカリキュラム改正を見据えて、周手術期看護実習における学生の深い学びを得るための実習展開方法について検討していく必要があると考えた。

そこで本研究では、周手術期看護実習の展開方法と学生の学びとの関連について明らかにすることを目的として文献レビューを行い、学生が効果的に学ぶことができる周手術期看護実習について検討する。

II. 方法

1. データベースと検索過程

データベースとして医中誌Webを用い、過去5年間（2014年～2019年）の原著論文を対象に、「周手術期 and 実習 not 会議録」をキーワードとして文献を検索した。

2. 文献の除外基準

周手術期看護実習に関連した結果が述べられていないもの、学生の学習における効果が記述され

ていないもの、データ収集の時期が不明確であったものを除外とした。

3. 分析

検索した結果得られた46文献を、除外基準に従って整理した結果、条件を満たした19文献を対象に、マトリックス方式を用いて文献レビューを行った。

III. 結果

タイトルカードと文献の内容を基に3つの項目「実習の方法」「学生の変化」「評価・方法」を抽出した。抽出された内容から、『手術室・ICU実習（病棟外）の効果』、『実習の効果』、『記録用紙の効果』、『実習前の講義・演習との連携の効果』、『指導方法の工夫による効果』の5つの実習の展開方法と学びの関連に分類された（表1）。以下、文中の丸数字は表中の文献番号を示している。

1. 手術室・ICU実習（病棟外）の効果について

手術室やICUなどの特殊環境下での実習による効果について記述された文献で構成された分類である。手術室やICUは、患者の状態や環境などが一般病棟とは異なり、特殊な環境下での実習となる。こうした特殊環境下での実習の効果として、特殊環境における看護技術と患者を取り巻く環境や個人の尊重の理解が深まること（文献①）や、常に指導者を含めた看護師と共にケアに当たることでICU・CCU看護実習体験者は看護実践能力が上がる（文献④）といった効果が示されていた。

更に手術室での実習では、多職種連携、医療安全、手術進行から合併症予防についての学びが深まるという効果があると示されており（文献③⑤）、特殊な環境であるからこそ、患者の安全を守り、回復を支援するためのケアの方法を、具体的に学び身に着けることができる効果があることが示唆された。

2. 周手術期看護実習の効果について

ここには、周手術期の患者を受け持って看護過程を展開することを含む周手術期看護実習の効果について記述された文献が分類された。周手術期

表1 周手術期看護実習の展開の工夫と学生の学びの効果に関する文献

分類	文 献
『手術室・ICU実習(病棟外)の効果』	① 石渡智恵美, 菱刈美和子 (2018). 周手術期看護実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究. 帝京科学大学紀要, 14, 111-116.
	② 大塚知子, 牧野夏子, 城丸瑞恵, 他 (2018). 周手術期看護実習における手術室見学実習での学生の学び. 札幌保健科学雑誌, 7, 31-37.
	③ 磯本暁子, 柘野浩子, 塩見和子, 他 (2015). 成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の实習開始前自己学習目標と学習内容の分析. 新見公立大学紀要, 36, 43-48.
	④ 菱刈美和子, 石渡智恵美, 菊地きよ美 (2015). 周手術期看護実習における看護実践力の向上を目指した育成方法の検討2 - ICU・HCU看護実習を体験した学生の看護実践能力の獲得状況と看護技術、学びの分析より-. 日本看護学会論文集: 急性期看護, 45, 333-336.
	⑤ 河相てる美, 中田智子, 今川孝枝, 他 (2014). 成人看護学実習における手術室実習での学生の学び-手術室実習記録の分析からの考察. 共創福祉, 9 (1), 1-15.
『実習の効果』	⑥ 中井里江, 河相てる美, 中田智子, 他 (2017). 術後の回復支援における看護師の役割についての学生の学び-実習記録からの分析. 共創福祉, 12 (1), 33-40.
	⑦ 中村真理子, 薄井嘉子, 鈴鹿綾子, 他 (2017). 成人看護学急性期実習において学生が学んだと認識した看護の内容-グループの振り返りレポートから. 日本看護学会論文集: 看護教育, 45, 95-98.
	⑧ 薄井嘉子, 中村真理子, 鈴鹿綾子, 他 (2017). 急性期実習における看護実践能力の習得状況-実習グループのレポート分析から. 日本看護学会論文集: 看護教育, 47, 91-94.
	⑨ 石渡智恵美, 菱刈美和子, 榎田紗季子, 他 (2016). 周手術期・回復期看護実習における達成感のプロセス. 日本看護学会論文集: 急性期看護, 46, 301-304.
	⑩ 尾黒正子, 林由佳, 橋侑里, 他 (2015). テキストマイニングを用いた周手術期看護実習における学習内容の検討(第2報)-受け持ち患者の診療科別手術による比較. 日本看護学会論文集: 急性期看護, 45, 82-85.
	⑪ 菱刈美和子, 石渡智恵美, 菊地きよ美 (2015). 看護学生の看護実践力獲得に関する認識の検討-周手術期・回復期実習を焦点に. 日本看護学会論文集: 看護教育, 45, 82-85.
	⑫ 橋本茂子, 黒田裕美 (2014). 周手術期看護実習の体験を通して学生が振り返った学びの検討. 日本看護学教育学会誌, 24 (2), 49-55.
	⑬ 尾黒正子, 千田好子 (2014). 周手術期看護学実習における学習内容の検討. インターナショナルNursingCareResearch, 13 (1), 89-95.
	『記録用紙の効果』
『実習前の講義・演習との連携の効果』	⑮ 清沢京子, 塩澤実香, 佐藤圭子, 他 (2018). 臨床看護援助論IVにおける事例の看護過程演習と臨床看護学実習I・IIのアセスメントの評価における関連とその現状(その1). 松本短期大学研究紀要, 27, 3-9.
	⑯ 織田千賀子, 羽田智恵美, 堀井ひろ子, 他 (2014). 成人看護学実習に活かすための成人看護学演習内容の検討-急性期実習終了後の学生質問紙調査結果より. 愛知県看護教育研究会, 17, 38-45.
	⑰ 福岡珠美, 西山円 (2017). 成人看護学(急性期)の講義評価と実践実習との関係. 太成学院大学紀要, 19, 121-130.
	⑱ 牛尾陽子, 中村滋子, 小濱優子, 平井孝次郎, 他 (2016). 周手術期看護実習において看護学生が事前学習シートを活用することの有用性-学生に対するフォーカス・グループ・インタビューの分析から. 川崎市立看護短期大学紀要, 21 (1), 1-12.
『指導方法の工夫による効果』	⑲ 小島さやか, 小林祐子, 帆莉真由美, 他 (2017). 周手術期看護学実習における手術室実習の満足度を高める要因-実習状況および手術室看護師・教員の指導との関連. 新潟青陵学会誌, 9 (1), 63-72.

看護実習の効果について、一般的な周手術期患者の回復支援に加えて、学生が学んだと認識した看護の内容として【手術を受ける患者の看護実践】【手術を受ける患者の理解】【手術によってもたらされる不安】の3項目が明らかにされている(文献⑦)。また、学生が周手術期看護実習で『患者さんの不安が大きい』というイメージを持つことも示されていた(文献⑩)。このように、周手術期の患者の心理面、特に不安について学びを深めている傾向にあることが示された。

また、一般的な周手術期看護に関する学びを得るためには、学生は実習目標や内容を臨床看護師と共有することで、看護実践を振り返ることができ、看護師の役割も知ることができる(文献⑥⑧)ことを示しており、受け持ち患者や周囲のサポートによる学生の支援が実習効果に影響することが明らかにされている。文献⑩⑬では、受け持ち患者数や診療科の違いでは、患者中心の看護を思索することに影響は出ないことを明らかにしていることから、実習場面において学生が臨床指導者と連携を取ることができるよう調整しておくこと、実習中および実習後の丁寧な振り返りの時間をとることによって、学生の学びの深化につながることが考えられた。

3. 記録用紙の効果について

周手術期看護学実習における手術見学実習記録について、看護学生が意図的な手術室見学実習に臨めるように作成された手術室見学記録用紙を用いた指導の状況および手術室看護師が感じた記録用紙を用いた指導の効果について調査されていた(文献⑭)。記録用紙の内容は、患者が手術直前から手術室退室までの間におかれた状況と各時期で提供される看護援助の視点で作成されたものであり、手術見学実習での見学や観察ポイントが一目で理解できるように可視化されたものである。学生は、手術直前から退室までの流れや看護師が何を観察するのかといった観点が示されることで、実習の学習効果が高まることが明らかにされた。

4. 実習前の講義・演習との連携の効果について

4件の文献で、実習前の講義・演習と臨地実習

につながりを持たせることによる効果が示されていた(文献⑮⑯⑰⑱)。臨地実習では、学生は膨大な患者の情報から看護過程を通して患者を理解していく。そのプロセスにおいて、授業や演習、事前学習によって周手術期にある患者と行われる看護をイメージできるようにすることが、実習において新たな知識と実践を統合させ、実習で体験する事象の意味を理解することができるようになることが示唆された。

5. 指導方法の工夫による効果

手術室実習における指導と満足度に関する調査(文献⑲)からは、手術中には看護師が手術の進行状況や看護の役割、各職種の役割と連携などを随時伝えることによって、学生は今何が行われているかを理解しながら実習を行う事ができることが、実習への満足につながると考えられた。そのため、臨床指導者と事前に調整し、手術の場で行われていることを理解しながら実習を進められるように工夫することが、学習効果を高めることにつながると思われた。

IV. 考察

1. 実習の展開方法と学生の学びについて

周手術期看護実習は、術前・術中・術後と経過を辿る患者を理解することで、回復期支援の看護の役割を理解することができる。手術室・ICU実習は、病棟実習とは異なり専門性が高く、学生にとってより緊張度の高い特殊な環境であると言える。本学では2週間という実習期間の中で、全身麻酔下で手術を行う患者を受け持ち、手術室、ICUと特殊性の高い環境の中で看護を実践している。先行研究からも特殊性の高い環境での実習は学生の緊張もより高くなる(菊池ら, 2018; 服部ら, 2016)ことが明らかになっている。本研究では、こうした環境下で得られる学生の学びとして、看護実践能力の向上、多職種連携と看護師の役割の理解、医療安全に関する学びが得られることが示された。

また実習環境という点では、周手術期看護実習は患者の変化も速く大きく、また実習環境も一般病棟だけではなく、手術室やICUなどの特殊性の

高い環境下での実習となる。こうした環境は、学生にとっては学びにくい環境のように思われるが、むしろこのような環境を利用することで、学生のより実践的な学びや広い視野の育成につなげることができる可能性が示唆された。そのためには、臨床指導者と綿密に連携し、実習の目的・目標の共有だけでなく、指導方法の打ち合わせと期待される効果の共有なども必要となる。しかし、本田ら（2016）の調査では、基礎看護学実習に関する1病院当たりの受け入れ校は、300床以上で4校、400床以上の病院では5校となっており、年間を通じて1病棟で複数校の実習を受け入れている状況が推察される。本学の実習施設においても、1つの病棟で時期をずらしてもしくは一時期に重複して複数の養成校の実習を受け入れたり、混合病棟においては小児看護学実習と成人看護学実習というように、異なる領域の実習を受け入れたりする状況もある。このような雑多な状況の中で臨床指導者と連携し、学生への指導方法を共有するためには、実習施設との連携の在り方についても検討が必要であろう。

2. 学生が効果的に学ぶことができる周手術期看護実習について

効果的な実習を行うためには、記録用紙の整備や臨床指導者との連携などのような、実習そのものの展開方法の工夫と、実習前の講義や演習を実習と連携させるような工夫が必要であることが重要であることが示された。

周手術期のように患者の変化が激しく、また手術室やICUなどの一般的ではない環境下で実習を行う場合、学生が患者や行われるケアのイメージを持って実習に臨むことができるようにすること、学生の学習成果や知識を実習のその場で確認し、より実践的なフィードバックを臨床指導者から受けて理解しながら実習を行えることは、実習の効果を高めるための重要なポイントであると考えられる。また、実習で体験したことを振り返り、意味づけるための時間を持つことも、学生の学びを助ける重要な実習展開の工夫と言える。

周手術期は患者の変化も大きく、まさにその状況とは一期一会の実習となる。これらの工夫を行

う事によって、実習の一刻一刻が学生の経験知となりやすいものになると考えられた。

看護学実習について杉森（2006）は、「看護実践は単に経験すればよいというものではなく、必ず、科学的な根拠を必要とする。各看護学は看護実践の前提となる科学的な根拠を講義や演習という授業形態により提供する」と述べている。実習で学ぶということは、学内における科学的な根拠を含む学修を前提としており、さらに臨床の場で学生が自ら経験することによって更なる学習効果が期待できると言える。学生が臨床の場で実習を通じて学び取る力を養うために、教員は学生が主体的に学べるように実習前・後での学内実習や演習の方法および内容を検討していく必要がある。

近年、入院期間の短縮により、学生は看護過程が統合されないまま実習を終えるケースや、実習期間に複数の患者を受け持ち、実習後に統合して実習目標を達成するケースもある。こうした場合では、実習目標は達成されたものの、受け持ち患者への一連のケアとして看護計画を実施できなかったり、評価ができなかったりする現状もある。このような細切れの実習体験は、学生自身で意味づけることは困難であると思われるため、実習終了後に学内において自身が行った看護実践を振り返る機会が必要であると考えられる。例えば、シミュレーション教育の方法を用いて、学生が立案した看護計画を学生同士で実践しケア場面を振り返るなど、アクティブラーニングを用いて体験をつなぎ、知識として身に着けることができるような実習展開の工夫が必要であろう。今後は国内だけではなく、諸外国におけるとりくみなども参考に検討を重ねていきたい。

V. 結論

本研究では19の文献から5つの効果が明らかになった。

- 1) 『手術室・ICU実習（病棟外）の効果』では、特殊な環境であるがゆえに、学生は患者を守る視点で、多職種連携・医療安全の学習効果が高まっていた。
- 2) 『実習の効果』では、学び方には事前準備や実習中の学び実習後の振り返りを行うことが効果

的であった。

- 3) 『記録用紙の効果』では、手術室での見学や観察ポイントが一目で理解できるように可視化することが効果的であった。
- 4) 『実習前の講義・演習との連携の効果』では、学生が実習と講義とがイメージしやすい工夫と繋がりが大切であり、ロールプレイや反復練習による技術向上と緊張感を伴いながら実習へ臨むことが効果的であった。
- 5) 『指導方法の工夫による効果』では、術前に事前学習を提示して手術室看護のイメージを描き、手術中には看護師から直接看護の役割や連携などの指導を受けることで学生の満足度が高まる効果があった。

VI. 利益相反

本研究において記載すべき利益相反は存在しない。

引用文献

- 福本 仁美 (2014). 成人看護学実習における学生の学習困難に関する研究の動向－過去5年間の先行文献から－. 新見公立大学紀要, 35, 107-111.
- 福岡 珠美, 西山 円 (2017). 成人看護学(急性期)の講義評価と実践実習との関係. 太成学院大学紀要, 19, 121-130.
- 橋本 茂子, 黒田 裕美 (2014). 周手術期看護実習の体験を通して学生が振り返った学びの検討. 日本看護学教育学会誌, 24 (2), 49-55.
- 服部 由佳, 小幡 光子, 磯和 勅子 (2016). 周手術期看護実習中における看護学生のストレス反応と情動知能の関連. 日本看護研究学会雑誌, 39 (5), 75-83.
- 菱刈 美和子, 石渡 智恵美, 菊地 きよ美 (2015a). 周手術期看護実習における看護実践力の向上を目指した育成方法の検討 ICU・HCU看護実習を体験した学生の看護実践能力の獲得状況と看護技術、学びの分析より. 日本看護学会論文集：急性期看護, 45, 333-336.
- 菱刈 美和子, 石渡 智恵美, 菊地 きよ美 (2015b). 看護学生の看護実践力獲得に関する認識の検討 周手術期・回復期実習を焦点に. 日本看護学会論文集：看護教育, 45, 82-85.
- 本田 輝子, 梶原 江美, 小野 聡子, 他 (2016). 基礎看護学実習における臨地実習環境の実態. 西南女学院大学紀要, 20, 1-8.
- 石渡 智恵美, 菱刈 美和子, 榎田 紗季子, 他 (2016). 周手術期・回復期看護実習における達成感のプロセス. 日本看護学会論文集：急性期看護, 46, 301-304.
- 石渡 智恵美, 菱刈 美和子 (2018). 周手術期看護実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究. 帝京科学大学紀要, 14, 111-116.
- 磯本 暁子, 柘野 浩子, 塩見 和子, 他 (2015). 成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の实習開始前自己学習目標と学習内容の分析. 新見公立大学紀要, 36, 43-48.
- 河相 てる美, 中田 智子, 今川 孝枝, 他 (2014). 成人看護学実習における手術室実習での学生の学び 手術室実習記録の分析からの考察. 共創福祉, 9 (1), 1-15.
- 菊池 有紀, 吉岡 さおり, 窪田 光枝, 他 (2018). 周手術期・急性期実習における学生の精神健康度の変化とストレス・コーピング. 国際医療福祉大学学会誌, 23 (1), 137-144.
- 清沢 京子, 塩澤 実香, 佐藤 圭子, 他 (2018). 臨床看護援助論IVにおける事例の看護過程演習と臨床看護学実習I・IIのアセスメントの評価における関連とその現状(その1). 松本短期大学研究紀要, 27, 3-9.
- 小島 さやか, 小林 祐子, 帆苺 真由美, 他 (2017). 周手術期看護学実習における手術室実習の満足度を高める要因 実習状況および手術室看護師・教員の指導との関連. 新潟青陵学会誌, 9 (1), 63-72.
- 文部科学省 (2002). 看護学教育の在り方に関する検討会報告. 2019年6月20アクセス, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3_1
- 中井 里江, 河相 てる美, 中田 智子, 他 (2017). 術後の回復支援における看護師の役割についての学生の学び 実習記録からの分析. 共創福祉, 12 (1), 33-40.
- 中村 眞理子, 薄井 嘉子, 鈴鹿 綾子, 他 (2017).

- 成人看護学急性期実習において学生が学んだと認識した看護の内容 グループの振り返りレポートから. 日本看護学会論文集：看護教育, 45, 95-98.
- 織田 千賀子, 羽田 智恵美, 堀井 ひろ子, 他 (2014). 成人看護学実習に活かすための成人看護学演習内容の検討 急性期実習終了後の学生質問紙調査結果より. 愛知県看護教育研究学会, 17, 38-45.
- 尾黒 正子, 千田 好子 (2014). 周手術期看護学実習における学習内容の検討. *International Nursing Care Research*, 13 (1), 89-95.
- 尾黒 正子, 林 由佳, 橘 侑里, 他 (2015a). テキストマイニングを用いた周手術期看護実習における学習内容の検討 (第2報) 受け持ち患者の診療科別手術による比較. 日本看護学会論文集：急性期看護, 45, 82-85.
- 尾黒 正子, 林 由佳, 橘 侑里, 他 (2015b). テキストマイニングを用いた周手術期看護実習における学習内容の検討 (第1報) 1人受け持ちと複数受け持ちの比較. 日本看護学会論文集：急性期看護, 45, 325-328.
- 大滝 周, 大木 友美 (2017a). 学内〈大学〉での学びを〈臨床〉に繋げる成人看護学教育プログラムの開発 (第1報) 周手術期看護実習における学習ファイルの活用状況. *ヘルスサイエンス研究*, 21 (1), 25-31.
- 大滝 周, 大木 友美, 加藤 祥子 (2017b). 看護学生が手術室見学実習を意図的に臨むための教育的試み (第2報) 手術室看護師が感じた手術室見学実習記録用紙を用いた指導の効果. *昭和学士会雑誌*, 77 (4), 423-433.
- 大塚 知子, 牧野 夏子, 城丸 瑞恵, 他 (2018). 周手術期看護実習における手術室見学実習での学生の学び. *札幌保健科学雑誌*, 7, 31-37.
- 杉森 みど里, 船島 なをみ (2006). 看護教育学. 251. 東京, 医学書院.
- 牛尾 陽子, 中村 滋子, 小濱 優子, 他 (2016). 周手術期看護実習において看護学生が事前学習シートを活用することの有用性 学生に対するフォーカス・グループ・インタビューの分析から. *川崎市立看護短期大学紀要*, 21 (1), 1-12.
- 薄井 嘉子, 中村 眞理子, 鈴鹿 綾子, 他 (2017). 急性期実習における看護実践能力の習得状況実習グループのレポート分析から. 日本看護学会論文集：看護教育, 47, 91-94.